

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

系統と類型：ウラル語族を中心として  
(言語の発生とその歴史)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5541">http://hdl.handle.net/10502/5541</a>

## 系統と類型——ウラル語族を中心として

### はじめに

世界には四千以上の言語があるといわれる。普通このように言語の数を数える際、問題となるのが、言語と方言の区別である。つまり、言語によつては、類似性のために他の言語の方言とみなすべきか、独立した言語とみなすべきか、簡単に結論を出せぬものが多い。ここで言う、類似性は、言語が相互に親縁関係にある、あるいは同じ祖語から分裂発達してきたことに由来している。このような親縁関係をもつ言語ごとに世界の言語は分類できるが、これは系統分類と呼ばれる。

また、同じ系統に属さない場合でも、ある限られた地域の言語には、類似した特徴が認められることがある。これは、言語共同体どうしが長期間にわたり、緊密な相互接触を続け影響を与えあつたためであると考えられる。このような、地域的類似性による分類を地域分類と呼んでいる。

上の二つの場合、類似性は祖語あるいは近隣の言語から受けつくだという違いはあつても、歴史的な原因によるものである。ところが、まったくそのような原因によらぬ類似性が言語間に見られること

ウィリアム・ジョーンズ：

(Sir William Jones)

(1791-1846)

英國の東洋学者。一七八三年からカルカッタで東印度会社の法律顧問として務める。たわら、一七八四年に、ベルガールアジア協会を設立し、インドの歴史、文化、言語など広く研究した。ここで触れた彼の発表はアジア協会で行なわれたもので、これにより、印欧諸語の系統やその証明におけるサンسكريットの重要性に関心が払われるようになった。

ラスムス・ラスク (Rasmus  
K. Rask 一七五七—一八三〇)

デンマークの言語学者。近代歴史言語学の基礎を築いた。一八一八年に主著作である『古ノルド語またはアイスランド語の起源に関する研究』を発表した。比較において言語の全体構造に関心を向け、文法や音の体系的研究の重要性を強調した。後には古代ヘルンヤ語やフィンウゴル諸語の研究を行った。

フランツ・ボップ (Franz  
Bopp 一七九一—一八六七)

ドイツの言語学者、サンスクリット学者。彼はサンスクリットの知識を活し、印欧語族の文法や語彙の比較研究に大きな成果をあげた。下で触れた説は一八一六年に『ギリシャ、ラテン、ヘルンヤとゲルマン語との比較におけるサンスクリットの動詞活用体系について』で発表されたものである。

系統と類型

がある。この場合、類似するのは語彙や形態素などではなく、言語形式や構造である。類型分類は、このような特性によって、言語をいくつかのタイプに分類するのを目的としている。

## 系統分類

系統分類は比較言語学によって行なわれるが、この方法の発達は印欧語族の解明と関係が深い。比較印欧語学は、十八世紀末に始まるが、その背景には、当時ヨーロッパで台頭しつつあったロマン主義があり、民族のあかしとしての言語によりその源を求めようとする風潮が高まりつつあった。この学問の直接のひきがねになったのは、一七八六年にウィリアム・ジョーンズ (William Jones) が発表した、ギリシャ語・ラテン語とサンスクリットが同系であるという説である。このうち、十九世紀にはいり、比較言語学は急速に発展するが、創設者として有名なのは、ラスムス・ラスク (Rasmus Rask) とフランツ・ボップ (Franz Bopp) である。ラスクはスカンジナビア諸語の比較においてアイスランド語の起源を研究し、その文法を他のヨーロッパ諸語と比較することを試みた。そして比較言語学において中心的な役割を果すことになる音韻変化の規則性についての概念はラスクに始まるといわれる。いっぽうボップはサンスクリットとヨーロッパ諸語の動詞の活用における一致性に注目し、親縁関係の動かしがたい証拠とした。グリム (Jacob Grimm) は、「グリムの法則」と呼ばれるところの規則的な音韻対応がギリシャ語・ゴート語、高地ドイツ語の間に存在することを示した。このような音韻変化の規則性をシュライヘル (August Schleicher) は自然現象としてとらえ、ダーウィ

クリムの法則

印欧祖語の破裂音がゲルマン語において変化した推移に関する法則で、一八二二年グリムが発表したが、既に一八一四年ラスクも同様のことを発見している。これによると印欧祖語からゲルマン語のある段階にかけて次のような音推移があった。 $*bh, *dh, *gh \rightarrow b, d, g, *b, *d, *g \rightarrow p, t, k, *p, *t, k \rightarrow f, \theta, h$

の進化論を適用して、下位言語がその源となる祖語から分裂発展した様を系統樹にたとえた。さらに、印欧祖語を比較することで、すでに失われた印欧祖語の再構成を試みた。

こうして比較印欧語学は、早くからさまざまな発展を遂げた。これは、古代の文献資料が豊富にあったこと、音構造が複雑で、語形変化が屈折的であり、形態素の同定が容易であったことなど、恵まれた条件がそろっていたからであるといわれる。次に、このような条件が欠如していたにも拘わらず、比較的早く語族としての系譜関係を確立した比較ウラル語学について述べる。

このウラル語族については、印欧語族に比べ余り知られていないので参考のため、少し概観してみたい。この系統の言語としては、ヨーロッパでは、フィン語、ラップ語、ハンガリー語のほか、ソ連のヴォルガ河流域で話されるモルドヴィン、チェレミン、ヴォグル、ジリエーン語がある。またウラル山脈東側でもオスチャーク、ヴォグル語やサマイエード諸語が話されており、ヨーロッパからシベリアにかけてユーラシアに広く話されているといえる。これら諸語を話す民族が、同一の起源をもつことは、後述する比較言語学によって、かつては、彼らの祖先がウラル祖語と呼ばれるべき、一つの言語を話していたことが想像されることによる。つまり、ウラル祖語は約六千年程前に、ヴォルガ河流域で話されていたが、次第に分裂し、その一部は西へ移動し、現在のハンガリー語やフィン語となつたとされる。ところが、これらウラル系諸民族は、民族学的・形質人類学的には、実に多様で、ウラル民族としての共通した特徴をもつとはいえず、むしろ、それぞれの地域周辺の民族と類似した性質を呈する場合が多いといえる。人種的にみて、西のフィン人はスカンジナビア人と、ハンガリ

一人は、中欧の人々と大して違わず、ヴォルガ流域のモルドヴィンやチェレミン族はチュルク系のタール、チュバツン族と似ている。それに対し、サモイェードはツングース等モンゴロイドの特徴が著しい。一方、民族学的に見た場合、これら諸民族の生業は、農耕・酪農、遊牧、狩猟・採集と異なっている。そして、衣装、住居から社会制度、口頭伝承、信仰にいたるまで実に多様で、共通の祖語時代から継承したと考えられるのは数少い。このような文化事象の場合は、共通していてもむしろ、良く知られているように、環境や伝播による一致と考えられる場合が多い。言語的には、同じ系譜を継いでいても人種的、文化的には非常に異なりうるということ、また逆に、これらが似ていても言語の系統の証明にはならないことは、ウラル語族に属する諸語においてもいえるのである。

とはいっても、言語は変らずに系統が一目で判明するものとはいえない。音はもちろん、語の意味や形も変りうる。また、文化の発展とともに、新しい語が造られ、外部からも文化語がもたらされる一方で、忘れ去られ消えてゆくことばもある。しかし、言語の変化は後でみるように、比較的規則に近いものがあり、また容易に変化しにくい部分がある。これらを発見することにより、同系であることが証明されるのである。音変化の規則性は良く知られているし、いわゆる基本語彙といわれるものには、変化は及びにくい。これら、音変化の順や、共通する基本語彙の数や内容を調査し、近い言語をまとめてゆくなかで、次第に分裂してきた言語共同体各時代の民族学的状況を予想できる場合さえある。現在のウラル諸語に共通する語彙によりウラル祖語時代には、次のような生活をおくっていたと考えられている。人々は「魚」の「糊」で「木」を貼り合せた「弓」に「筋」を張り、「矢」を射

カストロン (Matias Alkaskari)

フィンランドの言語学者、民族学者で、ウラル比較言語学の基礎を築いた。一八三八一—四八年にラップからシベリアにかけて踏査し、ウラル系やアルタイ諸民族の言語・民族誌資料を収集した。これらを元にしたジリエーン、チェレミンシ語の記述文法やサモイェード諸語の莫大な比較文法がある。

て獲物を「獲つ」た。獲物は「荷櫓」に乗せ「犬」に引かせた。着物は「骨」の「太針」で「皮」を縫って作った。そして、社会は「父」、「母」、「嫁」、「婿」、「伯父」、「義姉」などを含む強い血縁関係のうえに成り立っていた。また借用語も同様に重要で、外部民族との接触の時代、接触の程度についての情報を与えることがある。例えば、古代ゲルマン語と思われる借用語は、バルト海沿岸のフィン系民族(フィン人、エストニア人、カレリア人)の言語に多くとり入れられているが、これらは、「オート麦」「カラス麦」「堆肥」「畑」「土」「チーズ」等高度な畜農業を学んだ証拠であり、「錫」「銅」「釘」「針」「錐」「鍛冶場」など一段と進んだ技術や道具をとり入れたと思われる。そして、「王」「王侯」「権力」「統治」「判決」「人質」「商い」「ポンド」などにより、政治、経済の面でも大きい影響をこうむったことが窺い知れる。

さて、話を元に戻すと、このようにして、祖語から分裂発展してきたウラル諸語のうち、ヨーロッパで話されるものについては、十八世紀初頭から親縁関係があるらしいことが知られていた。そして十八世紀末には、ハンガリー人のシャイノヴィッチ (János Sajnovics) がハンガリー語とラップ語を形態素の比較により同語族に属することを明らかにし、シャルマチ (Samuel Gyarmathi) はほとんどのウラル諸語の親縁関係を語形変化の比較によって示した。すでに十九世紀初頭にウラル語族は比較言語学において、印欧語族より有名であったといわれる。そして世紀半ばには、余り知られていなかった東の同系諸語についての調査が、カストレン (M. A. Castrén) やレグリ (Antal Reguly) らによって行われ、比較ウラル語学は飛躍的に発展を遂げた。

表 1

フィン語	エストニア語	ラップ語	ハンガリー語	ボグル語
talvi 「冬」	talv	talvi	tél	tääl
veri 「血」	veri	varra	vér	üür
mene-「行く」	mine-	manna	men-	men-

表 2

フィン語	エストニア語	ラップ語	ハンガリー語
käsi 「手」	käsi	kiehta	kéz
ken 「だれ」	kes	ki	ki
kala 「魚」	kala	kuolli	hal
kolme 「三」	kolm	kolbma	három

表 3

フィン語	ハンガリー語	ボグル語
syö 「食う」	eszik	täj
sappi 「脾臓」	epe	tēp

表 4

所格 *na~nä
フィン語 pyhä-nä 「祝日に」, čuoihkka-n 「蚊の季節に」 ハンガリー語 tél-en 「冬に」, ボグル語 tääl-nə 「冬に」
複数要素 *t
フィン語 kala-t 「魚(複)」, ラップ語 kuoli-t ボグル語 hul-t
1人称単数所有接辞 *ma~me
フィン語 kalani < *kala-n-mi, ラップ語 kuolla-m ハンガリー語 hala-m 「私の魚」

次にウラル語を例にとって言語の親縁関係証明の手順を示すことにする。まず、これら諸語には、表 1 にあるように、同一の起源を持つとみられる語が多く存在する。この

ような対応関係にある語彙は、もちろん系統上近い場合ほど多い。フィン語とハンガリー語は異なる語派に属し、はなれているが、対応する語は一五〇はあるといわれる<sup>1)</sup>。しかし重要なのは数よりむしろ対応するとみられる語の質である。なぜなら、異系統の言語の間でも語彙がやりとりされるのは珍しくなく、たとえば、フィン語にあるスウェーデン語からの借用語の数はハンガリー語との対応語の何倍にも達するであろう。一般に、自然現象、親族、動、植物、身体部位名や原始的生活様式、社会組織などを指す語彙および代名詞、数詞、基本動作を表す動詞などは変りにくいとされ、比較語彙選択のための目安とされる。また、言語間の親縁関係を証明するには、語が単に似ているというより、そこに現われる音の間に規則的な対応がなければならぬ。親縁関係が遠い場合にはむしろ異なっていてあたりまえで、それでも規則的対応を見つかることがきめてになる。次の表2では、明らかにフィン語、ラップ語のkはハンガリー語のkやhと対応している。そして、フィン語で前母音が続く場合はk、後母音が続く場合は、hとなっていることがわかる。また、次の例(表3)のように一見同起源とは思えないものも、複数の類例により対応関係が明らかになる場合がある。比較法により、語頭は、フィン・ウゴル祖語において\**s*であったことが知られている。

さらに、音の変化に加え、意味や品詞のクラスが変わっている可能性も考慮に入れなければならない。しかし、このような、意味の異なる語を扱う場合、音対応の規則性を立証するために、本来異なる語まで恣意的に取り込んでしまう危険性がある。誤った系統説の原因の多くはここにある。

音韻対応を示す基本語彙は、親縁関係の証明には有力なものであるが、それに劣らず重要視されるも



のに文法的形態素の一致がある。つまり、動詞や名詞などが文法範疇の選択で変化する部分は個々の単語とは異なり、非自律的要素であるため、それだけ言語の構造と結びついていて、変りにくいといえる。ウラル系諸語は、形態論的性格としては、一般に膠着的であり、接辞や語尾は語幹に接続される。たとえば、名詞変化の範疇には格、数に加え特徴的なものとして、所有人称変化がある。しかし、印欧語にあるような性の範疇は欠如している。文法的形態素は、系統上遠い場合、表面上一致しないようであるが、ウラル祖語にすでに存在していたものは、何らかの形でほとんどの言語に保存されている(表4)。また形態素の文法的意味は変化しても、語の形態論的構造は、そのまま保存されていることもよくある。

とは言っても、このような構造的特徴が似ているだけでは、親縁関係の決めるにはならない。構造も変りうるのである。同じウラル系に属しながら、東のオスチャーク語は述語動詞が文末に来る語順を保存しているのに対し、西のフィン語では、周囲の印欧語と同じく、目的語や副詞の前に現われるのが普通である。また、上に述べた所有人称語尾は、フィン語に非常に近いエストニア語では失われてしまっている。(フィン) *minun kala-ni* 「私の魚」(エストニア) *minu kala* 一方、次のハンガリー語とトルコ語の形態論的構造は驚くほど似ているが、これで親縁関係の証拠にすることはできない。

(ハンガリー) *házamból* 「私の家から」: *ház* 「家」-*(a)m* 「私の」-*ból* 「〜から」

(トルコ) *evinden* 「私の家から」: *ev* 「家」-*(i)m* 「私の」-*den* 「〜から」

このような形態、統辞的構造の特徴は、むしろ類型論の扱う問題で、系統論とは区別しておかねば

ならない。しかし、語彙、形態素や音韻の対応が十分見られない場合、系統関係の論議によくとりあげられるのは周知のことである。トロベッコイ (N. A. Troubetzkoy) は、語彙や形態素の対応よりむしろ重要なものとして、印欧語の類型的特徴を六項目あげた。これと同様に、ウラル諸語においても、このような特徴はいくつかあげることかでき、系譜関係の傍証としての価値は認められる。

このような多面的な比較研究の結果、同じ祖語から分裂した言語の親縁性が証明され、さらに上位、下位や近遠関係が明らかにされ系統が確立されていくといえる。しかし、一般にこうした系統は下位言語の近いものから理路整然と明らかにされるのはむしろまれである。むしろ、比較研究の緻密化や説の修正がくり返えされながら、下位言語の分類と整理が行なわれ、上位の分枝点にある言語へと進むのが普通であるといえる。

系統関係が確立された場合、それは図式的に、系統樹や系譜図の形で表わされるが、(図1参照) 図の暗示するように、言語が祖語から分裂したあととは、それぞれ完全に独立し、発展分裂をくり返すという仮説の上に成立していることがわかる。このような説に対し、シュミット (Johannes Schmitt) は、言語の変化とは、そのいくつかの中心から外縁に向って波の輪のように進むという波動説を唱えた。そして分裂したあととも、その輪の重り合う範囲で周囲の言語と影響を及ぼし合い、相互に類似点を示すと主張した。

## 地域分類

バルカン言語連合  
 ギリシア語、ブルガリア語、ルーマニア語、アルバニア語などは名詞のあとに後置される定冠詞が発達していることなど、周屈の諸語とは異なる共通点をいくつかもっている。これは、バルカン半島で、これらの言語が長期に互り相互影響、干渉しあったためと考えられる。

グリーンバーグ (Josef H. Greenberg 一九二七～)  
 アメリカの言語学者、人類学者、スタンフォード大学人類学教授。言語を人間の文化という広い視野でとらえようとするアメリカ人類言語学の系譜を継ぐ。言語の種々の類型の中に人類言語の普遍性を探求し、これに関する編著作が多い。

系統と類型

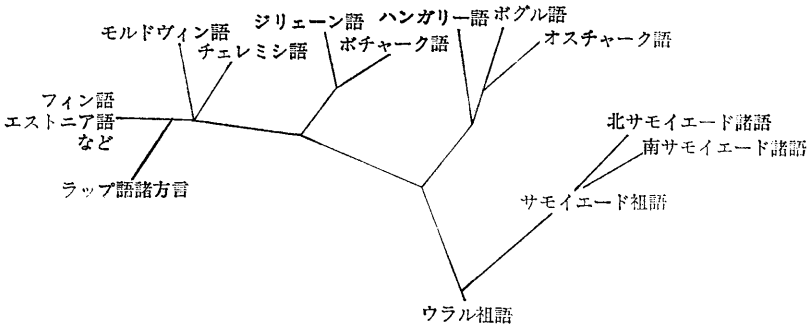


図 1 ウラル語族の系統樹

波動説は、系統樹説の言語が機械的に分裂をくり返すという主張と相容れないものであるが、そこに見られた、言語の相互接触による影響という概念は必ずしも系統分類と対立するものではない。すなわち、親縁関係とは全くかかわりなく、言語が長期間深い接触を続けると、それらの間に、複数の類似要素が認められる場合がある。言語がこのように地域的に相互間で特徴を共有する場合、言語連合 (Sprachbund) と呼ぶことができる。

良く知られたのは、バルカン言語連合 (あるいは言語群) であるが、ここでは、印欧語でも異なる語派に属するアルバニア、ブルガリア、ルーマニアそしてギリシア語が周屈の言語とは区別される共通の特徴を有している。これと、いくぶん類似した現象はウラル諸語の中にも見られる。フィン語やエストニア語などバルト海沿岸の諸語は複合時制や接統詞の用法において、明らかにゲルマン諸語との類似性をもっている。また、ボルガ中流で話されるチェレムシ語には、多くのチェバッシ語やタタール語の借用語があるほか、格の用法、

A. W. シンナーゲル (August Wilhelm von Schlegel)

(1767-1849)

ドイツロマン派の文学者、言語学者。ボン大学でインド学教授として活躍。弟のフリードリッヒ (Friedrich v. S. 1767-1845) も文学者、比較言語学者として有名。フリードリッヒは兄より先に、言語を屈折型とそうでないものに二分分類を試みた。

フンボルト (Wilhelm von

Humboldt 1767-1835)

思想家、プロイセンの政治家として活躍し、後年は言語学者として名高い。当時ドイツで主流であった印欧比較言語学に合せず、広汎に種々の言語を研究し、言語の本質を追求した。彼の主張した言語と民族性に関する説は後の新フンボルト学派に引き継がれている。

時制の体系、副動詞表現の豊富さなどこれらの言語と共通する点が多い。

この分類も系統分類と同様に、歴史的なものであるが、グリーンバーグ (Joseph Greenberg) の言うように、系統分類では正しい分類は理論的に言って、一つであるのに対し、この場合では恣意的要素が介入する可能性がある<sup>(2)</sup>。つまり、必ずしも、一つの分類におさまるとは限らない。まず、分類の尺度とする特徴の種類と量、更に、地域的などの範囲まで含めるかの問題がある。特に重要なのは、類似性の判断の基準である。一般に語は借用されやすく、全体に及ぶ構造や形式は影響を受けにくい。また表面的には類似していても、固有の特徴は保存している場合も考えられる。例えば、フィン語では、統辞的には周囲の印欧語に似た語順をもつが、形態構造は固有のものを残している。また、後置詞表現に加え、前置詞表現を発達させているようであるが、前置詞には、名詞の格機能を補う副詞的性格が見られる場合が多い。また、ウラル諸語にはロシア語から文を結ぶ等位接統詞 *i* が入っているが、節頭の接統詞をもたず、前の節の最後の語に後接辞をつけて表現するのが一般的であったため、*i* は最後の語の一部として発音されることが多い。したがって、完全に接統詞としては定着していないといえよう。

### 類型分類

上の二つの分類法は歴史的由来による類似性を基準にしたものであり、言語間に何らかの接点のあることを前提にしている。それに対し、言語間に全く接点を有さぬ場合でも類似性が見られる場合が

表5 ハンガリー語

ház「家」

	単数	複数
主格	ház	ház-ak
対格	ház-at	ház-ak-at
内格	ház-ban	ház-ak-ban
出格	ház-ból	ház-ak-ból

könyv「本」

	単数	複数
主格	könyv	könyv-ek
対格	könyv-et	könyv-ek-et
内格	könyv-ben	könyv-ek-ben
出格	könyv-ből	könyv-ek-ből

ある。このような類似は種々のレベルでおこりうるが、初期の類型分類の対象となつたのは、形態論的構造の類似性である。注目すべきは、当時の類型論は、言語をある基準に従って全体的にいくつかのタイプに割り当ててしまうことに関心があつたことで、その基準として、形態論的構造が選ばれるのに理論的根拠があつたとはいえない(3)。

十九世紀初頭、A・W・シュレーゲル(A. W. Schlegel)は、言語を、今日一般的な用語でいうと、孤立語、膠着語、屈折語に分類し、フンボルト(Wilhelm von Humboldt)は、さらに抱合語をつけ加え、類型分類で古典的な四分法の基礎を築いた。

孤立語とは、語が一つの形態素のみで成立し、動詞の活用や名詞の曲用などは存在しない。したがって、文法的意味や関係は、語順や独立した語によって表わされる。これには、中国語やベトナム語が属する。

膠着語では、語は複数の境界の明瞭な形態素によって構成されている。派生意味や文法意味・関係を示す要素はこのような語幹に接続される接辞によって表わされるが、接辞の異形はせいぜい自動的音変化によるバリエーションを示すのみである。また、接辞の異要素は一般に意味や関係と一対一の対応をする。ウラル諸語やいわゆるアルタイ諸語はこのタイプに分類されている。(表5参照)

屈折語の特徴は語幹内での音交替や、語幹と分離の困難な語尾により、活用や曲用が行なわれることにある。加えて、一つの形態素が複数の文法範疇を内包している場合が多い。表6に示した古代ノルド語の名詞変化表から格、性、数の要素を語幹から分離しとり出すのは容易ではない。

表 6 古代ノルド語  
maðr 「男」(男性名詞) ey 「島」(女性名詞)

	単 数	複 数	単 数	複 数
主格	maðr	menn	ey	eyjar
対格	mann	menn	ey	eyjar
風格	manns	manna	eyjar	eyja
与格	manni	monnum	eyju	eyjum

最後の抱合語では、一語中に一つの語幹要素と文法範疇を示す要素が多く含まれ、文に相当する内容を表現できる場合がある。しばしばこの用語は輯合語と同義語として用いられるが、カムリ(Bernard Comrie)は後者は、一語に複数の語幹要素をとり組むことができる言語であり、抱合語の一種であるとする(3)。

今世紀初めまで、このような形態的類型は孤立↓膠着↓屈折語と進化するものと考えられたり、言語共同体の社会的・文化的発展段階や精神・心理特性と結びつけられる傾向があった。ここには、明らかにヨーロッパのエスノセントリズムや機械的進化論が背景となっている。

やがて、アメリカでは、形態素の結合の仕方に基づいた類型の三ないし四分法では、とうてい諸言語を適切に分類することが不可能なことが認識され始めた。つまり、一つのタイプに属するとされてきた言語間の差異は非常に大きいという、一つのタイプの性質を純粹に示す言語も存在しないのである。これには、当時のアメリカの人類学者が、インディアンの言語や文化と接し、それらの驚くべき多様性を示し機械的進化論がこれらの解釈にそぐわないことに気づいたことも少なからず影響している。サピア(Edward Sapir)はその著書『言語』の中で新しい類型分類を試みている(4)。彼は言語の特性は語の構造にあると考えていたため形態論的分類の枠を越えることはできなかったが、分類の基準を三つ設け、それぞれをいくつかの段階に分けることにより精緻な特徴付けを試みた。それらの基準は、言語の要素が担う概念の種類(Ⅰ—基本概念、Ⅱ—派生概念、Ⅲ—具体的関係概念、Ⅳ—純粋関係概念)、語を構成する要素の総合度(分析的、総合的、抱合的)、および要素を結合する手法

(a) 孤立、b 膠着、c 融合、d シンボリズム) である。この分類によると、英語は、I、II、III、IV を担う要素が存在する複雑混合的言語で、II は c、III は c と d、IV は a の手法によって表現される。そして全体として、手法では融合的で、総合度では分析的な言語であるとされる。

サビアの類型分類は言語間の形態的差違を明示し、また同じ系統に属する言語が類型的にいかに関りうるかを具体的に示したわけである。のちグリーンバーグは (一九六〇)、サビアの分類に用いた基準があいまいで、主観的であったため、五つに細分化した基準 (1) 総合性、(2) 手法、(3) 派生と語形変化、(4) 語根に対する接辞の比率、(5) 文中の語の相互関係) を一〇種の指数で数的に示そうとした<sup>(5)</sup>。たとえば、手法は膠着度の指数によって示されるが、これは、膠着的構成の数を形態素の境界の数で割ることによって得られる。そして、この指数が〇・五以下の場合に融合的、〇・五―一は膠着的ときれるが、融合的といわれる英語は〇・三、膠着的とされるヤクト語では、〇・五―一となる。この方法論をウラル語に適用したコルホネン (Mikko Korhonen) によれば、膠着的と言われるにも拘わらずフィン語〇・二五、モルドヴィン語〇・二、ハンガリー語〇・三七、ラップ語〇・〇一となる。

グリーンバーグの方法によりそれまでの類型分類は行きつくところまで行きついたといえるが、言語の全体構造としての統辞にはほとんど関心を払わず、形態を中心に行っている点でサビアのそれと根本的に変ってはいない。類型基準の複雑化は、必ずしも言語の本質を明らかにするとはいえない。

この意味で、同じグリーンバーグの一九六〇年代以降の研究 (一九六六) は画期的であった<sup>(6)</sup>。彼はそれまでほとんど系統論において論じられることのなかった語順など統辞レベルの特徴を類型学にとり

込んだ。さらに重要なのは、個々の言語の差違を強調し、特定のタイプに分類してしまふことに関心のあつた類型学をむしろ差違の中に法則性を見つけ、言語一般の本質を探らうとする普遍論に近づけたことにあるといえる。

彼は、主語(S)、述語(V)、目的語(O)の語順と、他の有意味素間の現われ方の間に相関関係があることに注目し、きわめて慎重ではあるが、いわゆる含意の法則として表した。これによると、たとえば、VSOの言語と前置詞の間、SOVと後置詞の間には共起関係がある。このようにして、SOVの言語は一般に、名詞―後置詞、本動詞―助動詞、関係節(句)―名詞、形容詞―名詞などの語順をもつ傾向があることになる。これは、いわゆるアルタイ諸語やウラル語族のうち東部に行なわれるオスチャーク語、サモイェード諸語などに一貫してみられる傾向である。

また、グリーンバーグは言語のある事象において論理的に可能であるすべてのバリエントを通言語的に集積してみると、実際に起るタイプは限られていることを示した。例えばS、O、V、の相対的語順は論理的には八通り考えられるが、実際にはSOV、SVOが圧倒的に多く、VSOがそれに続き、VOSがわずか見られる他OVSやOSVはめつたに現われない。

このように、個々の言語をあるタイプに分類することより、むしろ言語の諸現象をタイプに分類し、その一般化を試みる傾向は近年、音韻、形態、統辞、語彙の面で広くみられる。注目すべきことに、類型学により導き出された一般的法則は、言語間の系統関係を仮定する際、重要な傍証となりうるし、祖語を再構成する際にも類型変化に関する法則は手懸を与えることができる。先にも述べた



ように、言語構造は変りうる。しかし、めったやたら無規則には変らないのである。現在、統辞類型学の関心の一つに、基本語順の変化に関する法則を発見することがあり、盛んに研究が行なわれている(2)。

類型学の成果としての普遍論は、かつて全く別個のものと思われていた系統論と類型論を結びつける可能性を提示しているといえよう。

〔参考文献〕

- (1) Ikonen, Erkki 1966, *Kieli ja sen tutkimus*. Helsinki.
- (2) グリーンバーグ・J・H (安藤貞雄訳) 「人類言語学入門」大修館書店
- (3) Comrie, Bernard 1981, *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford.
- (4) Sapir, Edward 1921, *Language*. New York.
- (5) Greenberg, Joseph 1960, A quantitative approach to the morphological typology of language. *IJAL* 26, 178-94.
- (6) —— 1966 Some universals of Grammar with particular reference to the meaningful elements. In Greenberg (ed.) *Universals of Language*. Cambridge, Mass.
- (7) Greenberg, J., Ferguson, Ch., & Moravcsik, E. (eds.) 1978 *Universals of human language*, 4 volumes. Stanford, Calif.
- (8) Lehmann, Winfred P. (ed.) *Syntactic Typology: Studies on the phenomenology of language*. Austin & London.
- \* Collinder, Björn 1960, *Comparative Grammar of the Uralic Languages*. Stockholm.
- \* —— 1974, *Language typology: A historical and analytic overview*. The Hague.
- \* Malinson, Graham & Blake, Barry J. 1981, *Language Typology*. Amsterdam, N. Y., Oxford.
- \* Robins, R. H. 1973, The history of language classification. In *Current Trends in Linguistics*, vol. 11., 3-44.